

春彼岸を迎えたお寺は、ご本尊様・ご先祖様へのお参りは勿論のこと、大切な社交の場としての役割を担い続けています。

特に、ここ二、三年はコロナの影響もあって、久しく会えずにいた方同士が再会を喜び、子や孫の成長に感嘆のことばを交わすお姿など、なごやかな空気が辺り一面をおおい、傍らにいる者まで幸せな気持ちにしてくれます。

境内の桜の蕾もふくらみ、春の到来を、肌が感じる季節となりました。皆さま、お元気ですか。

お彼岸―自らを省みる

お彼岸は、ご先祖さまから引き継がれた今ある命に感謝すると共により良く生きる為に

今の自分を省みる時期でもあります。



「痴^ち」愚痴、おろかさ」の煩惱をいいます。

―貧^{とん}（貪欲）

「先日、京都へ妻と二人で新幹線に乗って豪遊して来たヨ。一人十万円の食事をして・・サ」と知人が、うらやましいだろうといわんばかりに、私に話しかけてきました。「オー、オー、そうかい。そうかい。さぞや立派なウン〇がでただろうヨ」と私が言ったら、知人はゲンナリした顔をしていました。私達人間は、際限なくお金や物そして地位を追い求める傾向にあります。

―瞋^{しん}（瞋恚）しんに

小さないかりの感情が次第に大きくなり自分を制御できぬ形で、自らが不幸になっていくのです。

―痴^ち（愚痴）

誤った物の見方、考え方に固執して迷うことをいいます。心がイラ立ち、ゆとりのない時は難しいかも知れませんが、何が真

私達は、知らず知らずのうちに煩惱が膨らんで、自分勝手になってしまいがちです。欲がなければ人は成長しませんので、欲そのものはけつして悪いものではありません。煩惱とはいえませんが。

ただこの欲が、自己を見失い、際限なく貪り続けると貪る欲「貧欲」となり、煩惱となるのです。

お釈迦さまの教えの中に

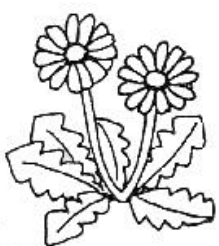
「小なりとも火を軽んずべからず」（雑阿含経）という言葉があります。

「小さな火も放っておくと、手に負えなくなつて、全てを焼き尽くしてしまうゾ」という意味で、ここで言う「火」は、本当の火であると同時に煩惱のことを指しています。

私達がより良く生きるために、最も取り除かなければならない三つの毒は「三毒」といわれ「貧^{とん}」むさぼり」「瞋^{しん}」いかり」

実なのか、そうでないのか、見極める力を養うことは大切なことです。

まずは心静かに考えましょう。



今という時は、二度と戻つて来ません。日々の生活に感謝し、心静かにご先祖様に

手を合わせ、自らを振り返り、足元の大切なものを見失わないように、より良き人生への第一歩を踏み出したいものです。

笑談

先日知人が、境内にいた私達夫婦を撮ってくれた写真を持って来てくれたらしい――「らしい」というのは、妻がその写真を、私は勿論子供達の目にも触れないように隠してしまつたので、実物にお目にかかつていなかったのです。

「〇〇君、写真を持って来てくれたんだつてネ？」と私。

妻「ウン。でも私ネ、スゴイおばあさんに撮れていて・・悲しいから、見せたくないヨ」と言うのです。

若い頃だからといって、たいした美人でもなかったけれど、若いというだけで、キラキラと輝やいていた昔が忘れられないようなのです。

「欠け椀も もとは吉野の桜なり」という俳句、知ってる？

今では欠けたお椀にしか見えないかもしれないが、これでも昔は大勢の人に美しいと愛でられた吉野の桜だったのヨとお椀がいくら言ってみたとこで、誰も欠けたお椀をみて、吉野の桜だったなどとは思わないだろう。

昔はどうあれ、今が欠たお椀なら欠けたお椀でしかないじゃないか。欠けたお椀でいればいい。吉野桜だった昔を忘れられないから惨めになるんだヨ。

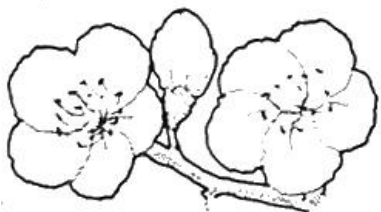
○人からほめられると 得意になる

人からそしられると 腹が立つ

しかし

他人の口先で

自分のねうちが決まるものではない。



お寺から

○コロナ以来、近頃は、お葬式が多様化してまいりました。一日葬、はなはだしい時は、直葬といった形でしか仏様をお送りできないお葬式もあります。

故人と御遺族との関係、又金銭的なこと・・諸事情がいろいろあつて、葬儀の形態を選ばれていると思いますが、生と死の境目、又のこされた方々の心のけじめ、こういう時代だからこそ、次の世代の人々への継承の儀式としてお葬式をとら

年をとつて若い頃を懐かしんでも、どうにもならない。

その時を素直に受け入れて、そこで十全を尽くす。精一杯生きる以外、手はないっていうこと――。

私もお坊さんなので、一応、こんな話を妻にしたわけです。

聞き終わつた妻は、しぶしぶ写真を出して来ました。間違いなく、バァーさんが、写っていました。

一口伝導板

○死ぬことは

その時まで生きること

○過ぎた事より 今からと

明日を信じて 立ち直れ

○勝つ人は強いが

ゆずる人は 更に強い

えていきたいものです。

お亡くなりになつた方が出た場合、まず、

お寺に御一報下さい。

各家庭の御事情をふまえて、悔いの残らぬお別れをして差し上げられるよう、御相談に応じます。

○檀信徒の皆様は、少しでも心地よく、使っていただけるよう、客殿の改築工事を計画しておりました。

昨年末、従来の客殿も撤去し終わり、今年を着々と工事が進められることと、楽しみにしています。
